

〔発表〕

## 東京同文書院について

東亜同文書院大学記念センター長 馬場 毅

私の発表は「東京同文書院について」でございます。時間の関係上少し早口でしゃべりますので、若干お聞き苦しい点があるかと存じますが、よろしくお願ひします。



最初に、東京同文書院を経営した東亜同文会ですが、これは綱領に「中国の分割に反対し、中国の領土を保全し、中国の改良を助成する」ことを掲げております。その「中国の改良を助成する」ために、日中の人材養成を行ないました。最初に設立した南京の同文書院では、その人材養成を行うことを試みましたが、これは 1900(明治 33)年に起こった義和団事件の影響で継続できなくなりまして、翌 1901 年上海に移りまして、上海の東亜同文書院になります。上海の東亜同文書院は日本人の人材養成に限定しまして、清国人留学生の人材養成は、東京同文書院が担うことになりました。

それで、東京同文書院の性格ですけれども、清国人留学生に対して日本語と、旧制中学程度の普通学を教えました。普通学って何かといいますと、歴史とか地理とか数学とか、まさに普通の、旧制中学で教えるような教科を教えています。これは性格として、より上級の学校に入るための予備の学校と

いうものでありまして、全員寄宿舎に入れたところに特色があります。とくに、当時日本のほかの学校が短期の速成教育をやったのに大変批判的でありまして、2年間の期間を保証し、学力をつけることを目的としていました(1906 年末には 3 年制に移行)。

創立期に入学した学生層ですけれども、これは張之洞の派遣した留学生と、福建省の福州の東文学堂、ここは東亜同文会の関係者が経営しておりましたけれども、そこで日本語を学んだ者であります。一言でいうと、清国のエリート予備軍が派遣されてきた。ちょっと名前をあげますと清末の段階で陸宗輿(駐日清国公使)、劉崇傑(横浜総領事)、王環芳(北京資政院議員)、林榮(北京大学堂法政科学長)など、外交官とかですね、大学の学部長クラス、それから中央の諮問機関でありました資政院の議員といった形で、そうそうたるメンバーが派遣されてきた。これは卒業後の進路であります。

それで、このような日本語を教えていました予備の学校のなかでも、東京同文書院は特色として地方政府の張之洞らの高級官僚や、中央政府から派遣された者が多いということが言えるかと思えます。今述べました張之洞のほかに、1905 年以後になりますと、奉天の小学・師範・中学教育を普及するために、奉天将軍が学生を東京同文書院に送ってきたことがあります。そのほかですね、清国が海軍の再建をしていくというときに、海軍士官を日本に派遣してきてですね、日本で養成するということをやりましたけれども、それについて、東亜同文書院の関係者ならびに東京同文書院の院長でありました長岡護美が斡旋した、という事例があります。

このような関係は、辛亥革命後も継続していきま

す。第二革命のあとに、各省の依託学生として、武官が東京同文書院に派遣されてきたこともあります。これは、中国の近代化に寄与することを、少なくとも東京同文書院は目的としていました。

それからですね、東京同文書院および東亜同文会関係者が、清国公使館および文部省と清国人留学生とが対立したときに、両者の間に立って仲介活動をやった例があります。一つは1902年の軍人養成のための成城学校への入学を、清国公使が「私費留学生が保証書を出さない」ことで拒否します。それで東京同文書院はほかの2つの学校とともに清国人留学生の身分保証をしまして、清国公使の保証書がなくても、文部省の所轄学校に入学できるようにしました。

もう一つはですね、1905年に日本の文部省が清国人留学生の取締り規則を出したときに、留学生が反対します。そして留学生の内部でも、ストライキをやって同盟休校をずっとやる派と、途中でやめて復校しようとする派が対立します。そのときに東亜同文書院関係者は、文部省と清国公使との間に立って調停をしています。

次はベトナム人の独立運動、いわゆる東遊運動に対する援助の問題についてお話をさせていただきます。ベトナムの独立運動家、ファン・ボイ・チャウ(潘佩珠)がですね、東遊運動と普通いわれておりますけど、独立運動を推進するために日本へ留学生を派遣します。東京同文書院へ留学させることになるきっかけは、ファン・ボイ・チャウが日本で梁啓超に会って、梁啓超から大隈重信や犬養毅という、当時の野党の代表的なリーダーに紹介されるとともに、当時東京同文書院の副院長でありました柏原文太郎、それから東亜同文会の幹事長ならびに東亜同文書院の院長などを歴任しました根津一などを紹介されました。このことがきっかけとなります。それで、最盛期は1908年でありまして、東京に約100名から150名位のベトナム人留学生がいました。そのうち60名が入学しておりますので、東京同文書院はベトナム人留学生受入れの中心でありました。

東京同文書院では、日本政府の弾圧を避けるために、彼らを清国人と称して、清国人留学生と同じように、上級学校の予備教育を施すとともに、ベト

ナム独立闘争の準備のための軍事教練をやりました。ここがちよっとほかの清国人留学生と違うところだと思います。それから当時日本にはベトナムの王族畿外侯クオン・デ(疆祗)と、ファン・ボイ・チャウがリーダーとしておりまして、そのもつでベトナム維新会が「新越南公憲」という憲法を制定したり、臨時の仮政府を準備したりして、独立の準備を着々と進めていきました。

いっぽう日本政府はですね、1907年6月に日仏協約を結んで、清国における両国の勢力範囲を認めるとともに、フランスが日本の朝鮮半島での優越的地位を認める代わりに、日本はインドシナ半島でのフランスの植民地支配を認めます。そしてフランス政府の要求に応じて、日本政府はクオン・デとファン・ボイ・チャウの国外追放と、留日学生団の帰国をさせようとしています。この時東京同文書院は1908年5月から12月にかけてファン・ボイ・チャウを寄宿舎にかくまったことがあります。

しかしながら1908年10月、東京同文書院に警察官数名が踏み込んできまして、ベトナム人留学生をすべて集めて、親元への手紙を書かせて、そしてその手紙がベトナムへ行って、親から帰国させる手紙が来ます。その結果多くの留学生が帰国して、それから1909年にはクオン・デとファン・ボイ・チャウも国外追放となり、東遊運動は失敗していきます。

この日仏協約の延長線上にですね、1910(明治43)年日本は韓国の併合を行なって、フランスがベトナムで行なったように、韓国・朝鮮を植民地化します。しかしながら、その政府の方針とは別にですね、東京同文書院がベトナムの独立運動を支援したということは、やはりちゃんと評価すべきことだ、というふうに思います。

その後辛亥革命後ですけども、革命後一時(日本への中国人)留学生は減るんですけど、1913(大正2)年から増加に向かいます。で、1914年までの留学者総数は、創立以来約3,000名といわれておりまして、そのうち準卒業生を含む(東京同文書院)卒業生は894名にのぼっております。しかしながら、1915年の日本の21か条要求による日中関係の悪化のなかで、東京同文書院も留学者が激減し、1919年の排日の五四運動を経て、ついに

1922(大正 11)年閉校となりますが、東亜同文会の中国人学生への教育という問題は、中国上海での東亜同文書院中華学生部にゆだねられまして、日本人への教育と中国人への教育というこの二つはですね、今後も継続していくということになります。その点を申し上げて、ちょっと時間が過ぎておりますけど、私の発表を終わらせていただきます。

**藤田** どうもありがとうございました。東京同文書院の歴史的な役割といいますかね、そのあたりをお話していただきました。ただいまの発表に関してはですね、台湾の中央研究院台湾史研究所副研究員の鍾淑敏さんに、コメンテーターとしてお話ししていただきます。よろしくをお願いします。

**鍾** 初めまして。こんにちは。中央研究院台湾史研究所の鍾と申します。馬場先生のご論文は東亜同文会などの一次史料に基づいて、詳しく書かれたものであると思います。私は東亜同文書院あたりの専門家ではなくて、まったくの素人ですから、同文書院のコメンテーターではなくて一研究者として、このご論文の感想を述べてみたいと思います。

台湾史の研究ですから、まず台湾との関わりについて話したいと思います。この論文の中にいくつか名前が出てきて、たとえば福州の東文学堂とか、それを見てまず思い出すのは、台湾総督府はその後東文学堂を支援します。その東文学堂は 1903 年に閉めましたけども、設備や施設は台湾総督府のものになります。

そしてまた一つ、振武学校の校長になりました福島安正将軍について、名前を見てすぐ思い出したのは、(日本が台湾を植民地化した)1895 年最初台北に入ったのはこの福島将軍であります。福島将軍には 1 冊の本がありまして、『満洲新世紀』という本があります。これを読んでたとえば日本と中国の近代化の違いを考える時、やはり台湾総督府の役割について、少し考えたら日中間だけでなく、もちろんこの時の台湾は日本帝国の一部ですけど、この台湾総督府の役割も一緒に考えれば、問題はもっと複雑になると思います。

そして、日中関係を考える時、私が不思議なことと思うのは、もう一つ、たとえば日清戦争によって中国の海軍、北洋艦隊は全滅しました。でも結局

日露戦争のあと、中国の海軍を再建する時、求めたのは日本です。留学生を派遣して、中国の北洋や南洋といった艦隊の再建を求めた。これも一つの不思議なことだと思います。でも、戦後になってもそうなんですけど、日中戦争が終わって、国民政府が台湾に移りまして、台湾の軍隊を再建する時も、日本の「白団」が役割を果たしました。これも、日本と中国の間の不思議なことだと思います。

もう一つは、東京同文書院の留学生についての先生の論文の中に、中国とベトナムの学生だけを話しましたが、ほかのところからの留学生もいたかどうか、これについて教えていただきたいんですけど。そして、日本は一方では植民地を持つ帝国でありながら、また「大東亜」地域の留学生の植民地反対・独立運動も支援する。これはすごく興味深いところだと思います。この東京同文書院が、留学生の交流の場になったかどうか、留学生に交流する場を提供したかどうか、教えていただきたいと思っています。

**藤田** はい、ありがとうございました。若干質問がありましたけれども、馬場先生、お答えは。ご感想ということでもよろしいですが。

**馬場** あの、フロアからご意見をお聞きしてまとめてお答えしたいと思います。

**藤田** そうしましたら、どなたか質問はございますか。時間がオーバーしないようお願いしたいのですが。では、どうぞ。

**発言者** 一つだけおうかがいしたいと思います。愛知大学の三好(章)と申します。ベトナムの運動家をかくまったとありましたが、それは学校としての意志をもってかくまったのでしょうか。つまり教員の個人的な行為であるのか、学校が組織としてやったのか、これは学校の性格に関わります。そして、もし組織としてやったのであるならば、その時の政府との関係についてお聞きしたいと思います。以上です。

**藤田** では、もうおひとりいかがですか、どうぞ。

**発言者** 中京大の浅野と申します。あの、馬場先生のご報告でのアジア主義というものが、初期のその、輝く理想というものが、やがてのちにイデオロギーになっていくというか、その大きな流れの中に

東亜同文書院というものがあつたというのが、私の感想なんですけど、中国の近代化を最初は支援し、さらには孫文の革命派を支援してきた東亜同文書院が、1915年の対華21か条要求に対してはどのような立場をとつたのでしょうか。またその要求に対して中国の学生たちが失望しているということについて、何か対策はとられたのでしょうか。

藤田 では、まとめてお願いします。

馬場 はい、まず鍾先生のコメント、大変ありがとうございました。台湾総督府との関係等を入れると、もっと立体的になるのではないかと、大変貴重なご指摘をいただきました。これは今後生かしていきたいと思います。またベトナム以外のほかの留学生がいて、それと交流ができたのかという問題ですが、少なくとも辛亥革命、あるいはそのあとを見てもですね、清国人留学生が主でありまして、ベトナム人留学生は、そういった意味では副次的です。それ以外の国(からの留学生)はどれも見当たらないと思います。その点では後の東亜同文書院等々とはちょっと別かなと思います。それがまず一点です。

二つ目の(質問の)、三好先生のですね、「かくまったのは個人の行為かそれとも組織的な行為か」ということですが、基本的には個人なのですが、私はかなり組織的だったと思ってます。まず、副院長の柏原文太郎、これが非常に熱心なのです。それから教員の中にもですね、軍事教練を教える者がいるんですね。それからですね、清国人と名乗ってるわけですね。学籍簿自体は残ってないんですが、当時若干名前はわかるんですね。全部清国人の名前を付けてるんです。だが寄宿舎で寝ますから、清国人でないことはすぐわかる。にもかかわらず、入学させて教育している。したがってこれは個人ではできないと思います。それでは政府との関係はどうかということですが、これは犬養毅とか大隈重信とか、そういうところの支援があつたので、政府も簡単に手を出せなかったのではないかと思います。

それからもう一つ言いますとですね、ファン・ボイ・チャウが国外追放になるときに、頭山満、孫文の支援者としても有名ですけども、頭山が反対してるんですね、フランスに渡すことを。フランスは

実は、ファン・ボイ・チャウやクオン・デを渡せというんですね。それを日本政府は、直接渡すのを阻止する。それに犬養や頭山満なども、大いに活躍してる。その点で、東京同文書院時代においてもですね、これはかなり組織的にベトナム人留学生に対応したと思います。だから最後に、留学生弾圧に警察が乗り込んできたんじゃないのかと、私は思っています。

それからですね、当時東亜同文会の会報として、『東亜同文会報告』というのがあります。ベトナム人留学生については、そこにはいっさい出てこないですね。では東京同文書院がベトナム人留学生を受け入れたことを今何でわかるかといいますとファン・ボイ・チャウが書いたものとか、『東亜先覚志士記伝』に記録されているもの以外に、外交史料館に残っている史料からです。外務省などがファン・ボイ・チャウらを調査していますので、それも記録は残っている。警察が孫文などを監視したのと同じように、ファン・ボイ・チャウやクオン・デなどを一生懸命調査している。ところがなかなかわからないのです、どこに行ってるのか。クオン・デのほうはわかるのです。で、ファン・ボイ・チャウはどうも、東京同文書院がかくまったのじゃないか(1908年5月～12月)、と警察は言っています。それが二つ目です。

それから三つ目、浅野先生のご質問にお答えしたいと思います。21か条要求の時はどうだったろうかということですが、これは東亜同文会を含めて考えたいと思うんですけど、このことについて昨年(2011年)私は、11月に東亜同文書院大学記念センターで、辛亥革命100周年のシンポジウムをやった時に、東亜同文会が1905年からだいたい15年ぐらいまでに、どういうふうに変動に対処したかということをご報告いたしました。その中でですね、東亜同文会の理念であります、中国の、当時の言葉でいうと支那の保全、これを継続します、辛亥革命以後もですね。ただし21か条の経済的側面の状況については、ある意味21か条要求よりもより強烈な要求を出しています。そして、それが実現しなければより強硬な措置を取れということを言っています。つまり21か条要求(への抵抗)に対しては、東亜同文会としても許容していないというふうに思います。

したがって、その傘下にある東京同文書院の留学生への対処の仕方、つまり留学生がリアクションとして帰るわけです。これについてはですね、引き留めようとするのですがほとんど効果はない、ということになります。したがって、21か条の時東京同文書院がどう対処したかという、辛亥革命直後も減りましたがやがて(学校に)戻ってきた。しかし21か条要求のあとは全然、留学生は戻ってこない。そういう意味ではやっぱり、21か条要求というのは大きく日中関係をそのあと規定していきますし、その枠組みの中で、東京同文書院もなす術がなかったのではないか。だからこそ現地・上海で留学生を集めるという、東亜同文書院の中華学生部構想に移るのではないかと思います。

藤田 どうもありがとうございました。時間がかかりオーバーしましたが、いろいろ新しい視点をいただき、ありがとうございました。